

「柳ヶ坪型土器」について

● 宮腰健司

有段口縁壺の内外面に羽状刺突を施された土器が「柳ヶ坪型土器」として初めて認識されたのは1952年の柳ヶ坪遺跡の調査であった。その後事例は増え、名称も定着してきた。本稿では柳ヶ坪型土器の要素のひとつである口縁部の内外面刺突に着目し、定義や分類・変遷・分布といった基礎的な問題について整理した。

はじめに

「柳ヶ坪型土器」という名称は、1952年に行なわれた横須賀中学校の発掘調査の報告書で、杉崎章氏によって用いられたのを嚆矢とする。この中で杉崎氏は、当該の土器が出土したピットが寄道式をまじえた黒色有機砂層を切っていることから、寄道式に次ぐ時代のものとして「柳ヶ坪型の土器」という呼び方をされている（杉崎1953）。さらに1956年に刊行された『横須賀町史別冊 横須賀の遺跡』（杉崎1956）では「稜をつくって上方に折れ立った口辺部の、内外面に櫛がき羽状文をめぐるしている壺形土器があるが、この土器は伊勢灣・三河灣の海浜地帯に盛行して、この地域における弥生文化後葉の標識となっており、私たちが「柳ヶ坪型」と仮称しているものである。」として、一定の壺に対しての名称であることを示されている（図1）。

大参義一氏は「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」（大参1968）において、「柳ヶ坪型」と呼ばれる広口壺形土器は元屋敷期から見られるが、盛行するのは石塚期であるとし、斉一性をもった土器であることや、二重口縁壺やパレススタイル壺形土器の系譜にあると述べられている。また岩崎卓也氏も、「柳ヶ坪」型土器をパレススタイル土器の嫡流として位置づけられている（岩崎1985）。一方、浅井（北村）和宏氏はパレススタイル土器の論考の中で、以下の三つの疑問点をあげられている。i）「宮廷式土器」の胴部紋様の変遷過程からするならば、胴部紋様が直線紋帯と波状紋帯からなる「柳ヶ坪」型土器を「宮廷式土器」の嫡流に位置づけるには連続性の上でやや難があるものと考えられること。ii）「柳ヶ坪」型土器は原則として赤彩されないこと。iii）殆どの「柳ヶ坪」型土器の底外面には木葉痕がみられる（岩野見司氏御教示）のに対し、「宮廷式土器」にはかかる

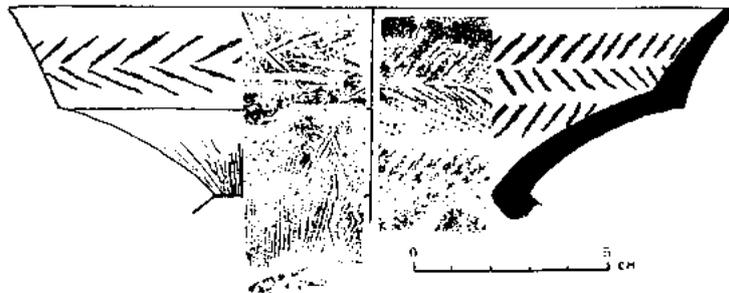


図1 柳ヶ坪遺跡出土の柳ヶ坪型土器（杉崎1956より）

分類

ここで改めて柳ヶ坪型土器を定義しておきたい。まず1) 口縁部が有段状を呈する、2) 内外面に刺突が施される。刺突は横方向に連続し、主に羽状を呈する。3) 体部の文様は上半部に限られ、横方向の直線文と波状文が組み合わされる。4) 体部文様帯及び口縁部文様帯の下部はミガキ調整されることが多い。5) 底部は大きく、円盤状を呈し、底外面が上げ底状に凹面をなすものもある。底外面には木葉痕が残る、6) 赤彩は施されないといった点があげられる(図2)。一方同じ斉一性を有するパレススタイル土器には、a) 口縁部は有段状を呈するが、内面にのみ刺突が施され、外面は凹線または無文で棒状・円形浮文が付けられる。b) 体部上半に文様帯が描かれるが、直線文+波状文・斜位連続刺突→斜位連続刺突・山形文→山形文と変化する。廻間IIからIIIには直線文+山形文のみとなる。c) 口縁部外面から頸部、口縁部内面の文様帯下の頸部、体部外面の文様帯の下位、山形文に赤彩がなされるといった特徴がある(図3)。

今回柳ヶ坪型土器を分類するにあたり、筆者がかかわった姫下遺跡や八畝畑遺跡が所在する矢作川流域の遺跡で出土した柳ヶ坪型土器を用いた(図4)。分類の基準として、定義した1~5まですべてをあてはめていくことが理想であるが、実際の調査においては口縁部のみが出

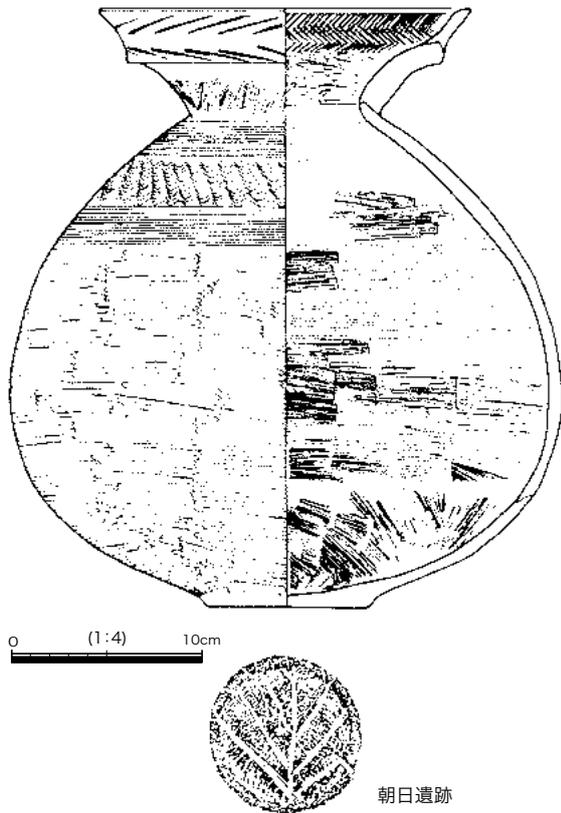


図2 全形がわかる柳ヶ坪型土器

例がみられないこと(浅井1986)。

本稿では浅井(北村)が提起された問題点を念頭におきつつ、筆者が近年かかわることとなった安城市の姫下遺跡や岡崎市の八畝畑遺跡を含む矢作川流域の遺跡から出土した柳ヶ坪型土器を基にして、伊勢湾周辺地域の様相をみていきたい。

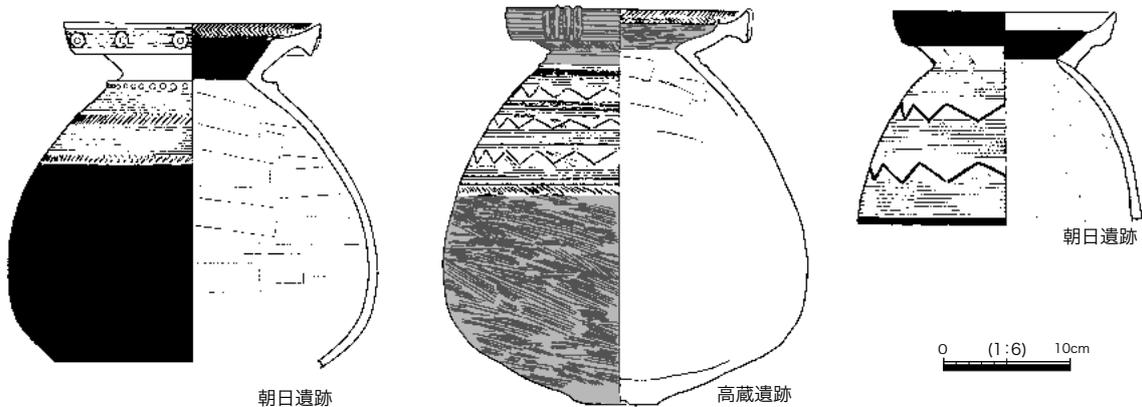


図3 パレススタイル土器

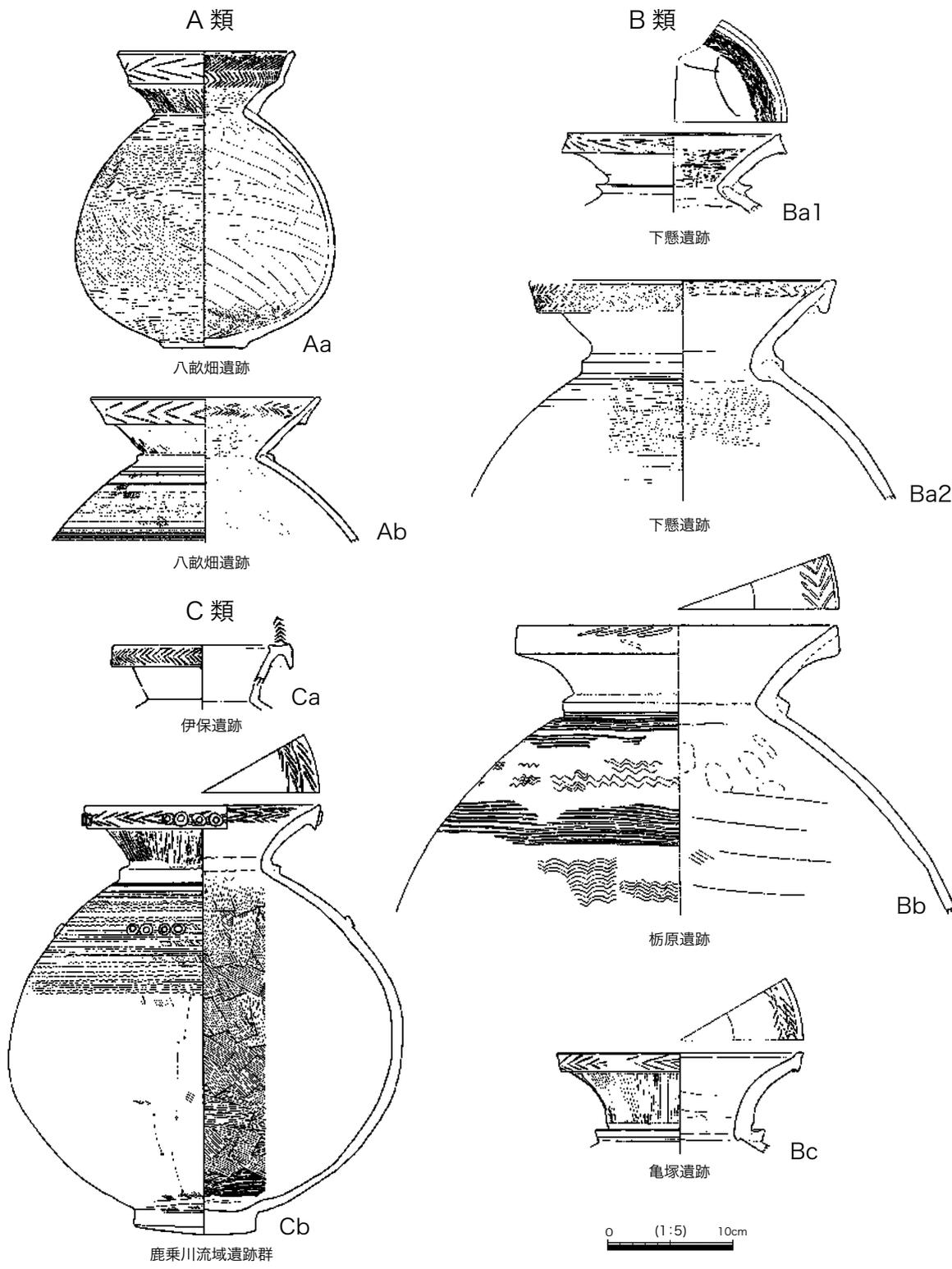


図4 矢作川流域における口縁部内外面刺突加飾壺の分類

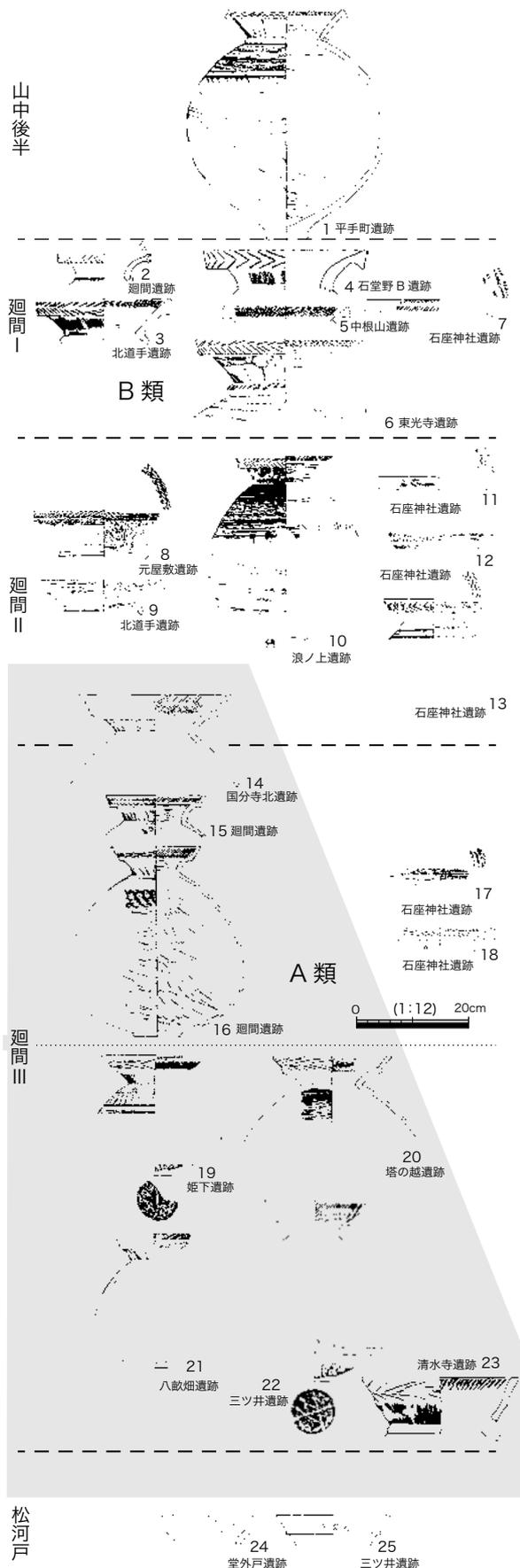


図5 口縁部内外面刺突加飾壺の変遷

土することが極めて多く、口縁部から底部まで揃った個体は数少ない。また木葉痕を有する底部片も目につくが、柳ヶ坪型土器と確実に特定することは難しい。直線文帯と波状文帯が組み合わさった体部片も同様である。そのため今回柳ヶ坪型土器を考えるにあたり、まず2の内外面の刺突に着目して口縁部を抽出し、1の口縁部形態を合わせて分類を行なった。この2（刺突）の要素をもった土器を、本稿では口縁部内外面刺突加飾壺として呼ぶ。

A類 口縁部が逆八字状に延び、その後上方及び斜め上方に延びて有段となるもの。bは直線的な口縁部の外側に粘土を付加して有段にしているもの。

B類 口縁部が明瞭な有段状とならないものである。aは口縁部端が下方及び上下方に延びるもの、bは面やや肥厚して面をなすもの、cは上方に短く延びるものである。頸部に突帯が巡るものが多い。

C類 口縁部の形状がパレススタイル壺などの加飾壺と類似または折衷したもの。

この中でA類とBc類については区分が難しいものが散見された。その場合B類に特徴的な頸部突帯を目安に分けている。

変遷

上述した分類を踏まえ、口縁部内外面刺突加飾壺の変遷を考えてみたい(図5)。

まずA類については、頸部が上方に立ち上がるものから外傾するものに、屈曲して有段となる口縁上半部が、短く・垂直に近く立ち上がるものから、幅広く・外傾するものに移り変わる形態変化が想定できる。廻間遺跡SZ01出土の16が廻間III前半に比定されるので、19姫下遺跡234SU出土・20塔の越遺跡SX01出土のものが後出に、さらに21八畝畑遺跡4037SU出土・22三ツ井遺跡96BaSK14出土のものへと変化していくと考えられる。19・20・21・22共伴する遺物からも概ね廻間III後半から松河戸I前半になると思われる。また口縁部端の形状についても、水平な面をなすものから、外

傾する面をもつもの、段をもたずにそのまま収束するといった移り変わりが想定できる。さらにこのような有段・刺突の要素をもつ土器が、松河戸期の有段口縁の壺・甕へと影響を与えたと考えられるが、口縁部に刺突が施されるものが極めて少ない上に内外面ともに刺突されるといった土器はみられない。また体部の文様もみられなくなっており、直接的な系譜としては捉えにくいものとなっている。さらに清水寺SB4出土の23は、廻間III後半から松河戸I初頭に比定される。口縁有段部があまり目立たず、頸部に突帯が巡っており、B類との折衷が考えられる。

B類については、口縁部端が面をもって内傾し、下端部が斜め下方に延びるものから、口縁部端面が垂直になり、端部が垂下するもの、口縁部端面が上下に拡張せず、垂直な面をもつもの、さらに口縁部端面がわずかに外傾し、端部が上方に延びるものへと変化すると想定する。ただ形態の変化を大きく概観すると、このような変化を認めることができるが、B類の土器に関しては共伴遺物などで確認することは難しい。その中でも、口縁端面が垂直となり、端部が垂下する廻間遺跡SB32の2は廻間I前半に、わずかに外傾する口縁端面を有する北道手遺跡SD10出土の9は廻間IIに比定される。さらに9よりわずかに古いと思われる北道手SD87出土の3は廻間I末～II初頭と推定される。ただ口縁端部が垂下する石堂野B遺跡SB004出土の4は、共伴遺物からみると廻間I末～II初頭となり、わずかに外傾する東光寺遺跡の6は山中末～廻間Iの可能性もある。またこのことに関連するものとして、石座神社遺跡出土の土器群がある。この遺跡は300棟を越える竪穴建物が検出されており、それらを基に早野浩二氏によって出土遺物の変遷が詳細に検討されている（早野2015）。それによると、口縁内外面刺突壺が現れるのは廻間I併行期で廻間III併行期まで続いているが、口縁部の形態はBの変化で想定したような単純でスムーズな変化を示さないようで、様々な形状の口縁部がそれぞれに変化していくといった様相が示されている。地域的なものも考慮して今後の課題となろう。

分布

図6・7は伊勢湾周辺地域における、口縁部内外面加飾壺の分布状況を示したものである。土器に関しては実見し数を数えたものではなく、報告書などからカウントしている。

東三河地域では、石座神社遺跡でのB類の出土が目立つ。ただ上述したようにその形態は多様で、遺跡の消長とも関わるがA類は出土していない。また豊橋市や豊川市の海岸部では、B類の多様性が石座神社遺跡ほどではなく、続けてA類の出土もみられる。また渥美半島の田原市山崎遺跡や西の浜久衛森遺跡でA類がややまとまって出土しているのが注目される。

西三河地域では、下流域の鹿乗川流域遺跡群周辺でのA類の出土が特徴的である。特に姫下遺跡や八畝畑遺跡のように集中的に出土する遺跡（地点）があることに留意したい。またこの地域では一定量のB類も出土しており、継続した集落群の存在が考えられる。反対に中流域から山間部にかけては出土量が極端に少なくなる傾向がみられる。

知多半島地域では、柳ヶ坪遺跡がある北部の東海市でA・B類ともわずかに出土しているが、南部ではみられない。ただ島嶼部の篠島にある神明社貝塚でA類がまとまって出土しているのが注目される。

尾張地域では、名古屋台地部ではあまり確認できないのに対し、庄内川を挟んで朝日遺跡周辺ではA・B類ともまとまって出土している。さらにこれより多くまとまった分布状況が見て取れるのが、一宮市・岩倉市のある北部地域で、下渡遺跡や御山寺遺跡でA類が多く出土しており、周辺でも多数の遺跡で認められている。またB類もそれに重なるように分布する。

美濃地域では、荒尾南遺跡では多様な形態をもつB類が40点程、Aも30点程出土しており、突出した状況を示している。荒尾南遺跡以外ではA・B類とも水系に沿った点状の分布を示す。

伊勢地域では、津市から松阪市にかけての地域でのB類の出土が目立つ。この地域でもBは多様であり、口縁部の片面のみの刺突を加えると、口縁部への刺突といった技法がかなり定着

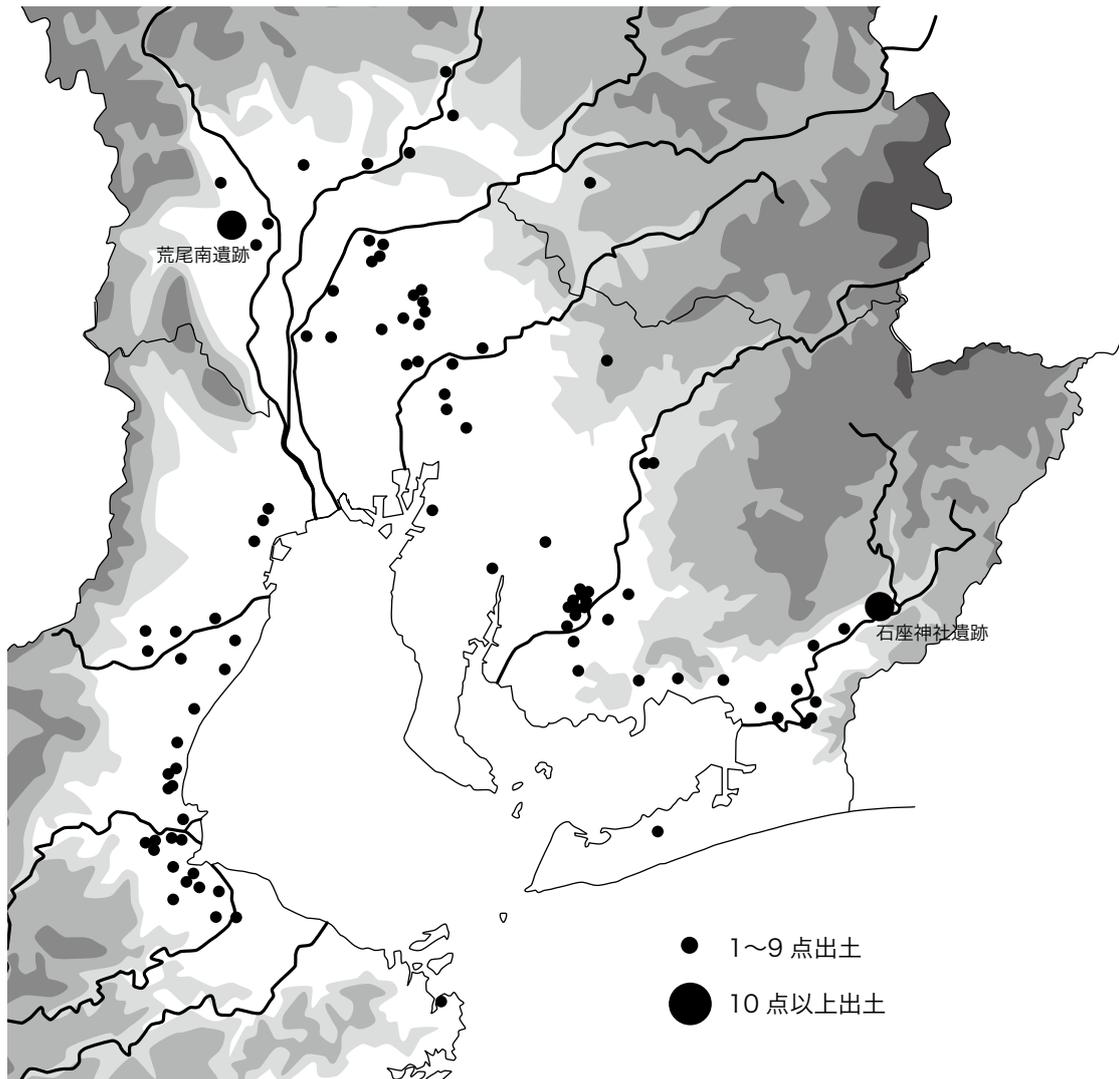


図6 口縁部内外面刺突加飾壺B類出土分布図

している地域といえる。またA類も一定量出土しているが、B類に比べると遺跡数・量とも少なくなる。また志摩地域の白浜遺跡で、A・B類とも一定量出土していることが注目される。

まとめ

これまで柳ヶ坪型土器及びそれから派生する口縁部内外面に刺突をもつ壺について述べてきたが、整理すると下記のようなになる。

まず柳ヶ坪型土器は加飾壺または加飾太頸(広口)壺に分類される。その中で形態・施文が多様であるB類のようなものと、パレススタイル土器のように斉一性が強いものがある。A類は後者にあたり、一定の型式設定が可能であ

ると考えられる。柳ヶ坪遺跡出土資料を基にして、A類を柳ヶ坪型土器として認識したい。

柳ヶ坪型土器の時期については、廻間III式期を中心としていることは動かしがたく、始まりが廻間II式期末からIII式期初頭、終わりが廻間III式期末～松河戸I式期前半と考えられる。またB類については廻間III式期前半まで継続していると思われる。

柳ヶ坪型土器の成立にはB類土器が深く関わっているが、そのみではなくパレススタイル土器や二重口縁壺の要素も加わって誕生する。全体の器形は後者の影響が強く、B類の文様要素と折衷し成立したのが柳ヶ坪型土器と考えられる。

それでは柳ヶ坪型土器はどこで生まれたので

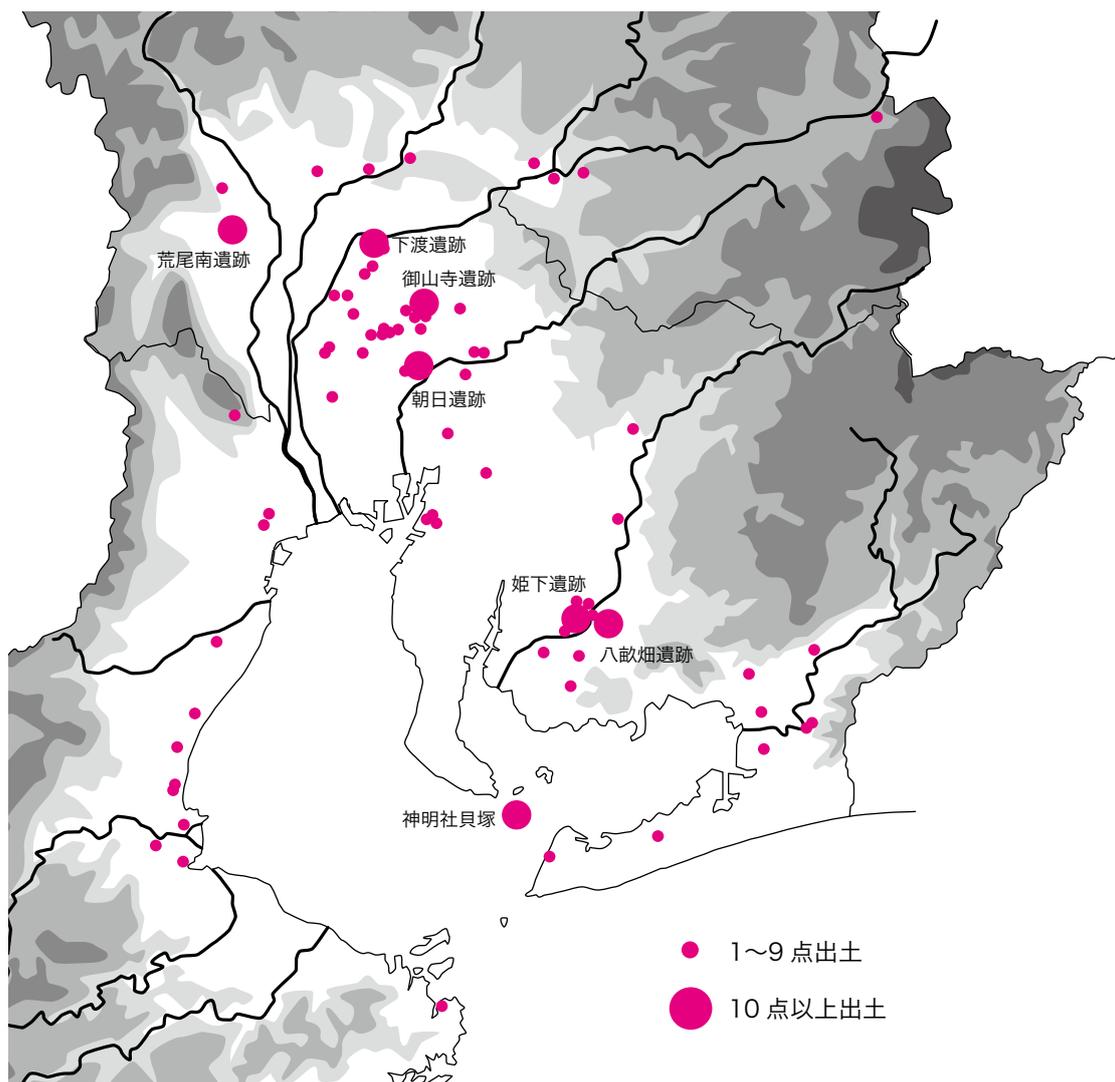


図7 口縁部内外面刺突加飾壺 A 類出土分布図

あろうか。B 類土器がある程度普及している地域とすれば、東三河山間部・矢作川下流域・尾張北部・大垣市周辺・南伊勢地域があげられるが、東三河山間部と南伊勢地域は A 類へと繋がっていない。矢作川下流域の可能性も否定できないが、パレススタイル土器との接点を考慮すると尾張北部、さらに大垣市周辺地域を含めた一帯で成立したと仮定しておきたい。

今回は口縁部内外面刺突という限定した要素から柳ヶ坪型土器をみてみたが、片面のみの刺突やさらに羽状文の使用といった面からもその成立を考えてみるべきであろう。またパレススタイル土器と柳ヶ坪型土器は、直接的な系譜関係にはないとの見通しをたてたが、両者はどちらも斉一性も強くもつ土器であり、時間的にも

パレススタイル土器が衰退する時期に柳ヶ坪型土器が成立するといった、一連の関係を窺わせる面も持つ。広域に斉一性をもつこれらの土器の性格や、製作・流通に関わる問題が浮かび上がってくる。さらに遺跡でまとまって出土する例も多く、杉崎章氏も指摘されていたように神明社貝塚や白浜遺跡のように海岸部近い遺跡での出土があることや、下渡遺跡や鹿乗川周辺の遺跡のように河川に近い低地部での出土も目立ち、その用いられ方を考える上で遺跡の性格や出土状況にも注意が必要となる。

本稿ではまったく単純化して考えたが、今後柳ヶ坪型土器の成立についてのさらなる詳細な検討や土器の用途などの解明が必要と考えられる。

参考文献

- 浅井（北村）和宏 1986 「〈宫廷式土器〉について」『欠山式土器とその前後』
岩崎卓也 1985 「土師器による編年」『季刊 考古学』第10号
大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」名古屋大学文学部研究論集（史学）47
杉崎章 1953 『柳ヶ坪貝塚』愛知県知多郡横須賀小学校
杉崎章 1956 『横須賀町史別冊 横須賀の遺跡』愛知県知多郡横須賀町
杉崎章他 1971 『柳が坪遺跡』東海市教育委員会
早野浩二 2015 『石座神社遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第189集